

2024 年度 日韓次世代学術フォーラム

2024 年 6 月 29 日、30 日の日程で日韓次世代学術フォーラムが福岡県太宰府市にある日本経済大学で行われ、宗教学研究室からは私を含め三人が参加した。

https://uni.dongseo.ac.kr/japancenterja/index.php?pCode=japan_ja&mode=view&idx=307

【6 月 29 日】

午前 10 時から日本経済大学の鴻臚館で午前のセッションが開始された。発表・質疑応答は日本語または韓国語で行い、間に通訳をはさむという形式であった。

私は午前中に指定討論者として、李孝振（ソウル大）氏の「1930 年代平壤教区のエデュケーションと民族意識：カトリック運動(Actio Catholica)と『カトリック研究』を中心に」に対してコメントと質問を行った。

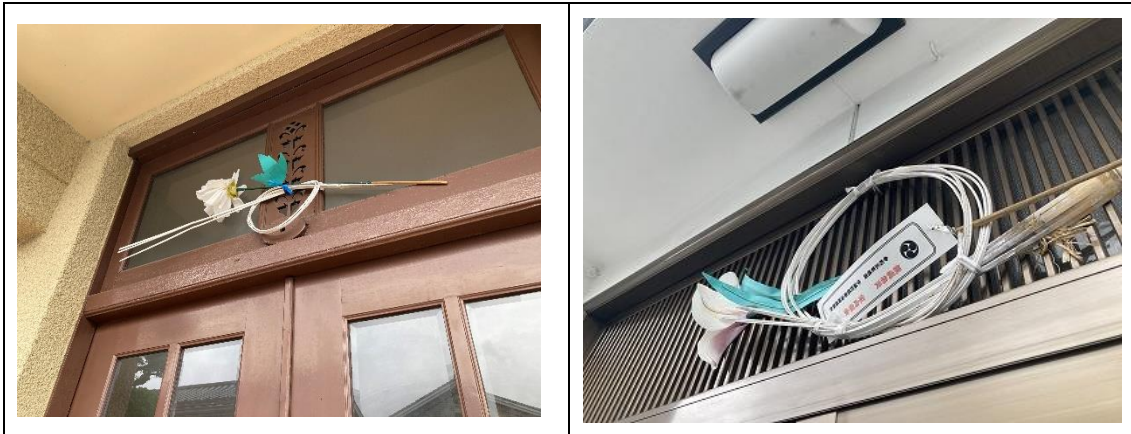
昼食と鹿取克章氏（日韓文化交流基金理事長）による基調講演をはさみ、午後のセッションでは今度は自分の研究発表を行った。題目は「大正隆正のキリスト教理解—「日本」とキリスト教の一断面として—」であった。発表後の質疑応答では、指定討論者の李氏の他、川瀬貴也先生（京都府立大学）や崔鐘成先生（ソウル大学）、新里喜宣先生（長崎外国語大学）から質問とコメントをいただいた。

午後 18 時半からは場所を移してレセプションがあり、食事をしながら参加学生・教員との交流の時間を持った。参加者は日本人のほか韓国人と少数の中国人で、アジア中心であったが、研究対象とする地域が近いので話が合い、交流ができて有意義であった。

【6 月 30 日】

この日は調査旅行であった。バスで大分県の日田市へ行き、日田の町並みと進撃の巨人ミュージアムを見学し、太宰府に戻り、九州国立博物館と太宰府天満宮を見学するというコースであった。

江戸時代、天領として栄えた日田には多くの商家があったが、現在ではそれらが伝統を生かした土産店に変身している。町を歩くと、各戸の玄関軒下に注連縄のような飾りが付けられていた（下の写真）。



これは「白々（パイパイ）」というもので、日田では夏に祇園の曳山行事（ユネスコ無形文化遺産）が行われるが、祭の後、山鉦に使われていた竹籤などをもらって、このように魔除けの飾りとするのだという。かたどっているのは百合の花のようであった。歴史ある町ならではの宗教的伝統（風習）を観察することができた。

進撃の巨人 in HITA ミュージアムは、「進撃の巨人」の原作者である諫山創氏が日田出身であることが縁になって、道の駅に設けられた博物館である。町おこしの一環であるが、いわゆる「聖地巡礼」として人気を集めている。アニメやマンガの世界観に触れ、自ら体験することを「聖地」への「巡礼」と捉えることは、宗教学の観点からも研究されている。

九州国立博物館では、キリシタンに関連した展示物として、東京国立博物館から貸し出された踏絵とマリア観音像（ともに重要文化財）とロザリオ、九州国立博物館のキリシタン禁制高札が展示されていた。ロザリオはキリシタン時代のものではなく、高札は珍しくない。九州国立博物館は九州を代表する博物館であるにもかかわらず、キリシタンに関しては展示品が乏しいと感じた。

太宰府天満宮は、本殿が 124 年ぶりの大改修で、仮殿しか見ることができなかったが、中国や韓国から来た人には珍しいようであった。恨みをもったまま死んだ人の霊（怨霊）を祀ったら、神となってご利益を与えてくれるようになるのだと、中国人に説明したら、不思議そうな顔をされた。私の語学力が不足していたからかもしれないが、根本的な原因は私自身が日本の宗教を曖昧にしか理解できていないところにあるだろう。日本の宗教を海外の人に正確に説明できるようになることの必要性を、改めて感じた。

六月末の梅雨に入って間もない時期だったこともあり、現地では断続的に雨が降り、飛行機が遅延したりしたが、そうした大変さよりも得たものの大きさが心に残っている。日本国内での開催ではあるものの初めて国際学会に参加し、研究発表を行ったことはいい経験になっただけでなく、研究に役立つ助言を得ることができ、人的交流という面でも貴重であった。調査旅行は自分で計画して行く旅行と違い、行こうと思わなかった場所に行き、見ようと思わなかったものを見るようになるが、そこに発見があった。同じことに関心を持つ研究

者と出会え、人脈が広がった。得られたものを積極的に今後の研究に生かしていきたいと考えている。

(文責：服部直美)